

# 「待つ」ことを必要とする人々

——異世代交流による出会い——

## People in Need of Being Waited

—An Encounter with Different Generation—

渡 邊 慶 一

WATANABE, Keiichi

キーワード：待つ、異世代交流、出会い、コミュニティ形成、子ども家庭福祉

### はじめに

異世代交流の多くは、他者からの「待つ」という能動的な働きかけによって、その存在の仕方そのものが変わっていく子どもと高齢者が出会い、つながりを創っていく場である。異世代交流の現場で子どもと高齢者の関係性を観ていると、子ども家庭福祉領域における相談援助の立場からも、新たな知見をもたらしてくれているように感じる。

本稿では、「異世代交流」の関係性をひとつの手がかりとして、「待つ」ということについて考察しようとしている。前提として、ここで、あらためて「待つ」ということがきわめて能動的な行為であることを書き留めておかねばならないだろう。

待つことは、ことばが紡ぎ出されるまでの時間の流れに、ただひたすら身を委ねることだけを意味するものではない。語り出されたことばに耳を傾け、聴き続けることをも意味している。自らの語りを静かに抑え、見守り、相手の語りに寄り添い続けることは容易なことではない。それは、時間の流れにただその身をあずけ、あたかも水面に漂うような感覚であるといってもいい。

筆者は数年前、鷺田清一氏が著した『「待つ」ということ』（2006年、角川書店）に出会った。それ以前より検討課題ではあったが、その文献に触発されて、あらためて「待つ」ということが語りかける深い意味について考えてきた。この文献との出会いは、筆者がかつて専門学校教員時代にクラス担任をしていた当時の学生の、卒業レポートを見つめ直すきっかけを与えてくれた。

そしてそのささやかなきっかけは、筆者の研究領域である相談援助において「待つ」ことがどれほど尊く、対象の成長を促すことになるのか、示唆を与えてくれた。

本来自己実現への支援をおこなうはずの福祉現場、子どもの成長欲求を育んでいくはずの教育現場、そこで働く人々の労働意欲を高めていくはずの組織など、当然のごとく差を生じる成長や活動の営みを待てないがゆえに起こる不幸が相次いでいる。

だからこそ今「待つ」ということが、あらゆる支援行動のなかに内包している尊さを問い直さねばならない。本稿では、その糸口を異世代交流に求めた。子どもも高齢者もライフステージからみると対極に位置づけられるが、共に「待つ」ことを必要とし、緩やかな時の流れを過ごすことによって、その可能性が変容する存在である。異世代交流を手がかりとして待つということについて検討してみよう。

## I. 異世代交流という方法

### 1. 異世代交流への期待—子ども家庭福祉の立場から—

#### 1) 異世代交流で育む力

ケアやコミュニティ形成の新たな方法として、異世代との交流が明確に位置づけられるようになってきた。では、異世代交流とはどのような方法を意味するのか、まずその概念を整理しておきたい。

異世代交流の一般的な目的は、子ども期や青年期、壮年期、高齢期のさまざまなライフステージにある人たちが、それぞれが持っている感性や能力、持っている技術を出し合うことにより、自分自身の心身の向上だけでなく、周りの人々や地域社会に役立つような活動へと育てていくことにある。そうした活動を展開していくなかで、一人ひとりがその主役となることが期待されている（草野 2004）。最近では、「世代間交流」という名称で実践されることも多い。

高齢者への情緒的ケアの側面からは研究成果が複数みられるが、子どもたちにとってはどうか。本章では、子どもを中心として異世代交流の意義について検討しておこう。子どもを中心として考えるとき、異世代交流が注目されるようになった背景には、次のような側面がある。

おそらく、現代社会の置かれた状況が密接に関係している。家族関係やコミュニティへの帰属意識が脆弱になっていくなかで、子どもたちの他者をつながろうとする能力やそれに伴う他者への配慮、すなわち他者とコミュニケーションする能力の基本的素養が築きにくくなっているのではないかという問題意識である。

子どもたちは成長すると、学校で学び、いずれは社会へ出て職業に従事し、自らの手により生活の糧を得ていかねばならない。楽しく学校へ通うためには、前向きに学習活動に取り組むだけの仲間や教員との豊かな人間関係も必要となろう。また、やりがいを感じる仕事の現場は、常に“チーム”として機能しているものである。そこで求められるものは何だろうか。

教育社会学者の門脇厚司（1999：64-68）は、社会を創っていくために求められる基本的な能力は、「他者を認識する能力」と「他者への共感能力ないし感情移入能力」だという。前者はたとえば、年齢や立場が上の人に対して適切な態度、言葉遣いができることを意味する。後者はたとえば、家族の一員のように大切に育ててきた犬を亡くした友達の気持ちを理解し、寄り添っていたわりの言葉をかけることができるような感覚を意味する。いずれも、人間として社会関係を築きながら生活を営んでいくために、大切な資質である。

異世代交流は、こうした能力の獲得に寄与することが想定される。門脇（2010：はじめにvii-viii）はこの能力について、「意図して“育てなければならないもの”であり、われわれ大人が“育てようとして育てなければ育たないもの”だ」という。そして、「『他者をつながりたい』『他者といい関係をつくりたい』『他者と協働したい』という性向や資質は、生得的なものではなく、生まれた直後から始まる大人との直接的な応答や、多様な他者と相互行為を繰り返すことによって培い育てなければならないもの」だと述べている（門脇 2010：はじめにvii）。

わが国において、子どもを中心とした異世代交流に関する研究が進んでいるとは必ずしもいいがたい。しかしながら、子どもがそうした能力を獲得するために必要な、相互交流の意図的な場づくりについて考察することは、高齢者のみならず子どもへの支援活動についても、何らかのヒントを与えてくれることになるだろう。

#### 2) 異世代交流の意義と方法

本稿では、主に子ども家庭福祉領域からみた異世代交流の貢献について考察しているが、子ども家庭

福祉の立場から異世代交流について取り上げた先行研究が現段階では稀少なため、本研究では子どもと高齢者相互の意義について挙げておくことで、今後の検討材料としたい。

たとえば、異世代交流の利点について草野（2004）は、①子どもにとって家族や学校だけに限定された人間関係の拡大、②高齢者の社会的孤立を防止、③高齢者の能力、英智、経験の社会的活用、④交流を通じての地域社会の統合、⑤歴史的・文化的交流と伝承、⑥社会問題の解決、の各項目を挙げて整理している。

こうした観点から、異世代交流は地域で生活するあらゆる世代にわたって意味ある活動であると考えられ、これからのコミュニティ形成のひとつの鍵になる可能性を秘めている。

また、異世代交流は、「富山型デイサービスとして全国的にも注目された、共生ケアや幼老統合型施設に代表されるような『ケア』の要素を強く含んでいる活動」「世代を問わず、子どもや高齢者が地域のイベントや環境整備の取り組みに積極的に参加することを促す『コミュニティ形成』の要素を強く含んでいる活動」といった、大きく二つのタイプに分類されている（黒澤 2009）。

## 2. 少子高齢社会と異世代交流の関係

1989（平成元）年に、合計特殊出生率がひのえうまの年だった1966年の1.58を割り込むことにより「1.57ショック」という造語が引き出されることで、少子化に対する社会問題としての認識が政府の中で明確に生じ始めた。しかしこの段階ではまだ、いずれ回復するという希望的観測でいたに違いない。1994（平成5）年のエンゼルプランにおいて起死回生の策を投じたものの、一向に少子化傾向の歯止めはかからなかった。それどころか、1997年には、人口構造において年少人口比率と老年人口比率が初めて逆転し、人口自然減へ向けて加速するという事態が起こっている。また、少子に相乗効果をもたらしたのが、医療技術の飛躍に伴う平均寿命の伸びであろう。

こうした社会現象により、少子高齢の波が到来したのである。現状のまま50年後を迎えると、日本の人口高齢化率は約40%になるとみられる。3人に一人が高齢者を支えるどころか、2人に一人を割り込んだ状態で高齢者を支えなければならなくなる。

しかしこうした社会現象を、逆に“好機”としてとらえることはできないであろうか。問題としての認識は、逆に古き時代の家族制度の良さへと立ち返る契機となる。三世同居が珍しくなかった時代、「おじいちゃん」「おばあちゃん」が若い夫婦の子育てを支え、子どもの育ちに一定の貢献を果たしていた。夫婦だけでは困難な子育ても、「おじいちゃん」「おばあちゃん」が時に厳しく、時に温かな見守りをもったまなざしで若い夫婦や子どもたちに関わることで、子育てと子育てに立ちはだかる壁を乗り越えることができた。

したがって異世代交流は、保護者の側から見ても「試行錯誤」の過程を支え、日々の子育てに新たな「工夫」の道を示してくれるものであり、子どもたちにとっては、その成長を支えることに貢献する営みといっても差し支えないだろう。それだけに現在、子どもや保護者の側に立っても注目を集めてよい活動なのである。（図1）

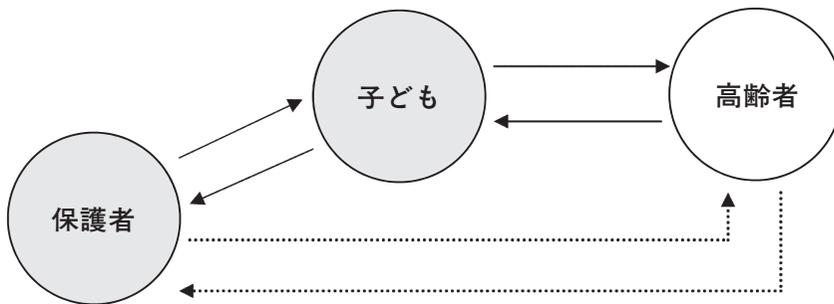


図1 異世代交流の関係性

### 3. 地域教育の再生

子どもの教育には、「家庭教育」「学校教育」「地域教育」で三角形を描いたときの支え合いのバランスが必要だといわれる。異世代交流は「地域教育」の一環として、子どもの成長にとってますます社会的要請が高い取り組みとなっていくことが期待される。映画「Always 三丁目の夕日」(2005年東宝配給により公開、監督：山崎貴、原作：古沢良太、『三丁目の夕日』ビックコミック・オリジナル連載)のような街であれば地域として自然な交流が図れるかもしれない。しかし、大都市圏になればなるほどそうした交流ができにくくなる。

最初は特殊なプログラムを組んで交流を促すことからはじめたとしても、それがいずれは日常的に生活の中に根づいていくようなくみになることが究極の目標である。カプラン (Kaplan, M.) は、異世代交流における交流度のレベルの目安として、次のような尺度を示している (カプラン 2004)。(図2)

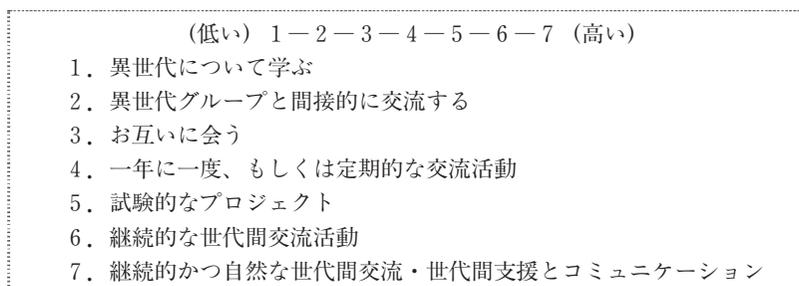


図2 異世代交流における交流度のレベル

出所) カプラン, M. (2004) 「世代間交流プログラム—「どの程度深く関与するか」の問題—」  
草野篤子・秋山博介編集『現代のエスプリ』第444号 (特集「インタージェネレーション—  
コミュニティを育てる世代間交流—」)、至文堂、51-58を一部修正

こうした活動の発展的展開を通して、日常の営みのひとつとして、地域で生活する人々をつなげ、日常の人々のヨコのつながりから輪を形づくり、それにより“地域ネットワーク”をつくっていくプログラムを異世代交流における理想の状態としたい。この観点に立てば、子ども家庭福祉の側面から異世代交流は、次のような効果をもたらすだろう。

- ①さまざまな世代から日常的に働きかけられ、子どもが反応を返すような日常行為の反復により、豊かなコミュニケーションや表現力、自分自身を大切に思う自己肯定感を培うことができる。

- ②子どもも保護者も、自信を失いかげそうな時や、悩みを抱えたり困難にぶつかった時、励ましの言葉や精神的な支えになってもらうことで、少しでも気持ちが救われる。
- ③コミュニティで生活する子どもたちを見守り、共にコミュニティで育てるという意識は、子育ての悩みをやわらげることになる。また、目が行き届くことで防犯の向上にもメリットがある。

2010年1月29日に閣議決定された「子ども・子育てビジョン～子どもの笑顔があふれる社会のために～」の基本的な考え方のひとつに、「社会全体で子育てを支える」がある。そのなかで、「地域ネットワークで支える」として「地域の子育て力を高め、それぞれの地域の特色を生かし、子どもと子育てを中心として地域のネットワークで支えるとともに、地域の再生を目指します」とある。こうした政府の方向性を、実効性を伴ったものにするため異世代交流に期待するところは大きい。

コミュニティ形成には、地域で生活する人々の意識が重要な意味を持つ。さまざまな世代の人々が、ある特定の地域を構成しており、人々がどの程度地域に愛着を持ち、どのような地域に育てていきたいかという意識がコミュニティを創り上げるのである。そのなかに地域の文化が育っていくのである（鳥越 2008）。コミュニティの担い手である子どもたちはコミュニティによって育てられる。その点で、地域教育が子どもの成長に果たす役割を新ためて問い直す必要がある。

## II. 異世代それぞれが必要とする「待つ」こと

### 1. 子どもや保護者にとっての「待つ」こと

子どもの成長を喜びとする営みには、苦勞の過程を忘れさせるだけの独特の感覚が伴う。この時を待っていたというような自覚を持つことはない。子どもと伴走することが必然の営みとなり、子どもの独り立ちを見送った時に及んでは、もはやそうした自覚を持つ必要さえないだろう。

さて、鷲田（2006：55）は、待つこととの関係性において育児について、「ひたすら待たずに待つこと、待っているということも忘れて待つこと、いつかはわかってくれるということも願わず待つこと、いつか待たれていたと気づかれることも期待せずに待つこと」なのではないかと述べている。

現在、「子育て支援」ということばが一般化している。しかし筆者はこの用語の持つ危うさが気がかりでならない。支援を受けながら、子は保護者が「育てるもの」という印象を拭い去れないからだ。子育て支援ということばだけが先を走ってしまうと、保護者に育児責任がかけられて精神的な負担を強くすることになりはしないか。

柏木（2008：162-170）は、「まず、考えるべきことは、子どもを母親だけに任せるのではなく、複数の多様な人々の手と心で育てることの重要性」だと説く。そして、「現在行われている子育て支援の多くは、支援の対象を『育てること』や『育てている人』としてい」として、何よりも本来支援の対象としなければならないのは、「子どもであり、『子どもの育ち』でなければならない」という。

また、「親は自分の子どもに対して欲があるため、ダメな点を叱ったり、子どもの現状よりも高い水準を要求しがち」であり、「そのようなマイナスのフィードバックを受けた子どもが自信をなくし、否定的な自己イメージをもちやすい」と述べている。そして、「子どもの特徴や長所というものを親は案外気づかずにいるものですが、親以外の人から認められ、ほめられる体験は、子どもにとっては励ましになり、自己発見や自信にもつながる」という、異世代交流に結びつくような重要な指摘をしている（柏木 2008：162-170）。

人間の凄まじいばかりの成長と変化の可能性を最も感じさせてくれる存在は、おそらく環境の影響を

強く受ける子どもではないだろうか<sup>1)</sup>。そのため、多種多様な出会いのなかで密室の関係性から解放される空間を創っていくことが、子どもにとっても保護者にとっても必要なのである。

## 2. 高齢者にとっての「待つ」こと

高齢期にさしかかると、思うように記憶できなくなったり、身体的自由が効かなくなったりするもどかしさを感じるが多くなる。身体的介護を要する高齢者であれば、若き日の自分とのギャップに一層のジレンマを感じるかもしれない。認知症の高齢者には、ある種特有の世界観がもたらされる。今その世界を生きている認知症高齢者へ適切なかかわりをしていくためには、高齢者の世界に「沿って」いきながら高齢者の生きる世界へとたどり着き、その背景にあるものに寄り「添って」いくことが必要である。

高齢者へかかわるといふことにはふたつの「そう」こと、つまり「沿う」と「添う」が含まれている。「沿う」は、生きる世界の輪郭を確かめる行動である。高齢者が語る流れに逆らわずひとつひとつの行為や語りを確認していきながら、共に歩いていくことである。「添う」は、傍らに在ることである。行為や語りの背景にあるものに寄り添いながら、共に時を過ごすことである。

メイヤーロフ (Mayeroff, Milton) は、ケアの条件のひとつに「忍耐」を挙げている<sup>2)</sup>。この「忍耐」は、「待つ」ことと密接に関係しているだろう。「忍耐」についてメイヤーロフは、「何かが起きるのを座視すること」ではなく、「全面的に身をゆだねる相手への関与の一つのあり方なのである」と述べており、「忍耐強い人は余地とか時間でなく、相手に生活していくうえでのゆとりを与える」という。ケアというかかわりは「相手の成長を信じ、忍耐強さを保持できる態度を意味している (Mayeroff = 1997: 43-45)。可能性が拓かれた生命力を持つ存在は子どもだけではない。認知症高齢者の変化を考察した記録もある (小宮 1999、小澤 2005)。

高齢者の行為や語りに対して「待つ」ことができなければ、高齢者を不安に陥れたり、混乱させることにより、情緒面への影響を及ぼすことになろう。ケアの現場では、それを問題行動としてとらえ、悪循環が起こることもあり得る。

しかし、異世代交流における高齢者と子どもの関係性にはそうした気負いが無い。自然発生的に育まれていくその関係性そのものが“ケア”へと変容していく。

## III. 異世代交流が教えてくれる「待つ」というかかわりの深さ

### 1. 異世代交流による「待つ」というかかわり

高齢者が子どもと交流することの意味として、子どもの元気な声を聞き、刻一刻と成長する姿を目の当たりにすることによって、喜びと心身の活性化につながるがよく報告される。しかし、異世代交流の意義はそれだけではない。子どもにとっても、社会を創っていくための態度や素養を自然に身につけていくことにつながり、高齢者と一緒に過ごすことで無条件に受け入れてもらえる貴重な体験をすることにも一定の貢献を果たす。

異世代交流の取り組みに継続的に参加した子どもたちの保護者からは、最初は高齢者を前に身構えていたが自然にあいさつができるようになった、表情がやさしくなった、体の不自由な高齢者に必要な配慮を察し手を差し伸べるようになっていった声が聞かれる。保護者にとっても子育ての一助になるが、そのようなやさしさと配慮に満ちた子どもたちの姿を前にした時、保護者としての喜びを感じ、異世代交流の意義を感じ取ることになろう (渡邊 2011)。

高齢者が傍らで戯れる子どもたちの様子を見守っている。膝の上にちょこっと座り高齢者の語りに耳を澄ます。保護者もまた、くつろぎながら時に身を委ねている。ゆったりとした時の流れのなかで、「待つ」ことが自然となる空間が創られていく。それが日常のなかで自然な交流が育まれていく異世代交流の理想とする姿なのである。

## 2. 「待つ」ことができる関係づくりへ

こうして異世代交流を通して「待つ」ということについて考えてきたわけだが、教育やケア（子育てや介助・介護）は、その相手である一人ひとりの思いに濃やかに耳を傾けることから始まり、また相手がいつの日かみずからの足で立つ、みずからを立てなおすのをじっと待つ、ということがとくに大きな意味をもついとなみである（鷺田 2012：83）。

子どもと高齢者は、一方は人生の始発期を過ごす存在であり、一方は終に向かう途上にある、ライフステージの対極に位置しているかにみえる。

子どもの成長を願うもっとも身近な存在は保護者であり、高齢者にとって身近な存在は、家族や親戚、友人等、抱える事情によってさまざまであろう。また、置かれた環境から、保育者や介護職、ソーシャルワーカー、医療スタッフ、ボランティアなどが身近な存在になっているかもしれない。

異世代交流の場においては、待つ人が専門職者であるかどうかということとはもはや問題ではない。その傍らに世代の違いや立場を超えて、待ってくれる人がいるということそのものに意味があるといえる。

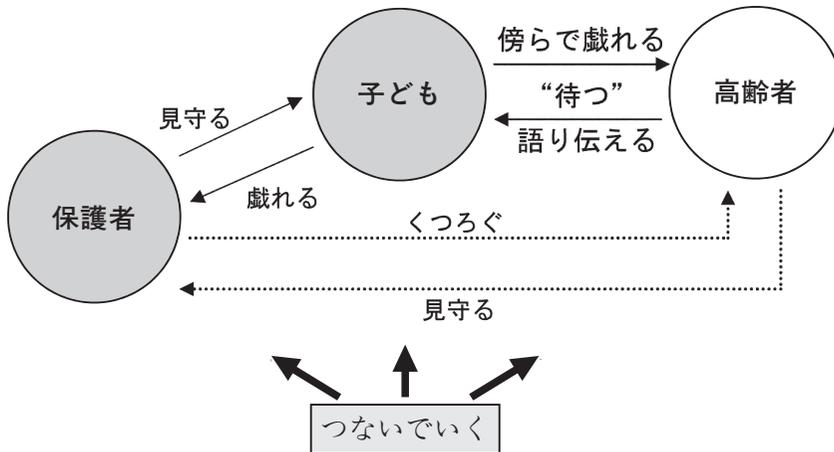


図3 異世代交流でつなげるかかわり

そういった人々の存在が同時に、異世代交流の場における触媒の役割を果たすことになる。子どもに対する「待つ」と高齢者に対する「待つ」。このふたつの「待つ」をつなげていくことにより、子どもと高齢者が互いに「待つ」関係性を紡ぎ出すようなつながりの日常空間を生み出していくことが、異世代交流の本質にある<sup>3)</sup>。

さて、現代における「待つ」ことに触れて鷺田（2006：10）は、憂いを込めて次のようにいう。

意のままにならないもの、どうしようもないもの、じっとしているしかないもの、そういうものへの感受性をわたしたちはいつか無くしたのだろうか。偶然を待つ、じぶんを超えたものにつきし

たがうという心根をいつか喪ったのだろうか。時が満ちる、機が熟すのを待つ、それはもうわたしたちにはあたわぬことなのか……。

この感受性の尊さを異世代交流の現場において、子どもと高齢者が教えてくれる。待つということは、待つ側に感受性が求められる世界である。待つてほしいという思いを共有できる両者だからこそ育まれる感受性の世界がそこに立ち現れるのである。

## おわりに

本稿では、「異世代交流」と「待つ」ということを関連づけながら考察を試みた。これにはまず、学生との授業実践で異世代交流の現場と接点をもつ機会が多かったことが挙げられる。近年、我が国においても注目を集めるようになり、実践の場にも広がりが見られるようになってきたが、欧米の研究実績に比べるとまだ発展途上の段階にある活動であるがゆえに、子ども家庭福祉の研究領域として関心を持ってきた。

一方、子ども家庭福祉領域の相談援助実践の面から筆者は、「待つ」ということを研究課題のひとつとして取り組んできた。「待つ」という視点に立って考えると、異世代交流にみられる子どもと高齢者の出会いは興味深いものであった。

さて、本稿の導入として筆者は、学生（以下、Aさん）のレポートに触れた。そのレポートは、『社会福祉を学んで—1996年～1998年社会福祉科生一』（関西保育福祉専門学校社会福祉科 1998）に収録されている。テーマは、「待つ勇氣<sup>4)</sup>」であった。このレポートにおいてAさんは、「待つことの意味」として、知的障害者通所更生施設（当時）<sup>5)</sup>での実習体験について触れている。

Aさんの気づきは、「立ち止まり相手の本当のニーズを引き出す努力をするには、時間や根気が必要」だとするものであった。そしてさらに、「『待つ』という行為には、大きな勇氣が必要」といった気づきに至る。豊富なボランティア体験を有するAさんは、「今日はだめでも、明日には私の存在に気づいてくれるだろう、同じ気持ちで同じ方向を向いていたら、何かが変わるかもしれないと、希望を捨てずに関わられた」という。そしてAさんは、そうした自分の態度や姿勢がどこからきたものなのかその由来をふりかえり、次のように語っている。

（「待つ」ことに対する気づきに至ったのは）今まで私自身が人に対して、「待っていて欲しい」と感じていたからではないかと思う。「待っていて欲しい」という思いに応えることは、一見全てが止まった状態に見えるが、私は立ち止まることこそ、先へ進む近道ではないかと思う。

※括弧内は筆者による。

鷺田（2006：10）のいうように待つことへの感受性を喪いつつある（もう喪ってしまっているのかもしれないが）現代において、Aさんは、障がいのある人々との関係性のなかで自らの生活史をふりかえり、「立ち止まる」ことが「先へ進む近道」だと述べている。Aさんのこのことばは、私たちに何を伝えてくれているのであろうか。待つてもらえなかった過去を述懐するなかで、自らのところに導かれてことばが生まれ出たのである。それだけ「待つ」ということは、子ども時代からの成長過程において人々の生活史に影響を及ぼす出来事なのである。

## 註

- 1) メイヤロフは「一人の人格をケアするとは、最も深い意味で、その人が成長すること、自己実現することをたすけることである」(Mayeroff=1997:5)とし、ケアの主な要素として「忍耐」のほか、「知識」「リズムを変えること」「正直」「信頼」「謙遜」「希望」「勇気」を挙げている(Mayeroff=1997:34-65)。
- 2) 柏木(2008:157-159)は、「子どもに応答的であること」と「子どもに備わっている敏感な感覚を使ってやりとりすること」が、子どもが愛着の絆を結ぶために必要であるという。
- 3) 斎藤(2010:139-154)によると、保育、介護、教育の専門家により異世代交流活動が行われることが多いが、これらの職種は本来「直接援助」の専門職であって、「職種間や職場間の連携・調整」をする職業ではないためその強みが発揮されにくいという。そこで調整の専門職として社会福祉士が担う役割の必要性を述べている。わが国における職業としての実情はさておき、国家資格を得るための学修内容としては子どもから高齢者といった幅広い分野を学び、ソーシャルワークを学んでいるのは社会福祉士である。斎藤の認識は、深さはともかく幅広い領域を理解し、異世代交流の場を「つなぐ」専門職として最も適切なわが国の資格、職業は社会福祉士だという。
- 4) 冊子では学生名が公開されているが、本稿による明示は控える。
- 5) 当時の法定上の名称を用いて記述した。知的障害者通所更生施設は、障害者自立支援法(現行法は、障害者総合支援法へ名称変更)の施行により、障害者支援施設となった。

## 文 献

- 秋山博介(2004)「インタージェネレーションと臨床社会学」草野篤子・秋山博介編集『現代のエスプリ』第444号(特集「インタージェネレーションーコミュニティを育てる世代間交流ー」)、至文堂、160-165
- 門脇厚司(1999)『子どもの社会力』岩波書店(岩波新書新赤版648)
- 門脇厚司(2010)『社会力を育てるー新しい「学び」の構想』岩波書店(岩波新書新赤版1246)
- カプラン、M.(2004)「世代間交流プログラムー「どの程度深く関与するか」の問題ー」草野篤子・秋山博介編集『現代のエスプリ』第444号(特集「インタージェネレーションーコミュニティを育てる世代間交流ー」)、至文堂、51-58
- 柏木恵子(2008)『子どもが育つ条件ー家族心理学から考えるー』岩波書店(岩波新書新赤版1142)
- 関西保育福祉専門学校社会福祉科編(1998)『社会福祉を学んでー1996年～1998年社会福祉科生ー』関西保育福祉専門学校社会福祉科、60-61
- 小宮英美(1999)『痴呆性高齢者ケアグループホームで立ち直る人々』中央公論新社(中公新書1498)
- 栗山昭子(2008)『世代間交流ー家庭教育の一環としてー』ふくろう出版
- 黒澤祐介(2009)「持続可能な福祉コミュニティの形成」草野篤子・金田利子・間野百子・柿沼幸雄編著(2009)『世代間交流効果ー人間発達と共生社会づくりの視点からー』三学出版、33-43
- 草野篤子(2004)「インタージェネレーションの必要性」草野篤子・秋山博介編集『現代のエスプリ』第444号(特集「インタージェネレーションーコミュニティを育てる世代間交流ー」)、至文堂、5-8
- 草野篤子・金田利子・間野百子・柿沼幸雄編著(2009)『世代間交流効果ー人間発達と共生社会づくりの視点からー』三学出版
- Mayeroff, Milton (1971) ON CARING, Harper & Row Publishers Inc. (=1997、田村真・向野宣之訳『ケアの本質ー生きることの意味ー』ゆみる出版)
- 小澤勲(2005)『認知症とは何か』岩波書店(岩波新書新赤版942)
- 斎藤嘉孝(2010)『子どもを伸ばす世代間交流』勉誠書房
- 世代間交流国際フォーラム(2007)『世代間交流国際フォーラムー世代をつなぎ地域を再生するために&世代間交流についての国際研究集会 発表原稿集ー』ペンシルバニア州立大学・NPO法人日本世代間交流協会・信州大学主催
- 鳥越皓之(2008)『「サザエさん」的コミュニティの法則』日本放送出版協会(NHK出版生活人新書246)
- 鷺田清一(2006)『「待つ」ということ』角川書店(角川選書396)

---

渡邊慶一（2011）「異世代交流による『待つ』空間の相互作用—『子ども—学生・保護者—高齢者』の三世代をつなぐ—」聖母女学院短期大学研究紀要第40集、32-39